コウノトリに選ばれた「田園環境都市 小山」のまちづくり

浅野正富

1 はじめに

私が市長選の公約の一つとして掲げ、市長就任後は市政の運営方針の一つとしているのが、「田園環境都市 小山」のまちづくりです。そして、昨年、今年と渡良瀬遊水地ではコウノトリが2年連続繁殖していますが、野外でコウノトリが繁殖しているのは東日本では渡良瀬遊水地しかありません。渡良瀬遊水地の一角を占めコウノトリが営巣する人工巣塔がある小山市は、正にコウノトリに選ばれた「田園環境都市 小山」と言えるでしょう。何故私が田園環境都市のまちづくりを発想するようになったのか、そして具体的にどのようなことを構想しているのか。私が小山市長を務めていく上で最も重要な仕事の一つと考えている「田園環境 小山」のまちづくりについて、後援会の皆様、市民の皆様に広く知って頂きたいと思い今回筆を執った次第です。

2 里山保全をきっかけとして

そもそもの田園環境都市の発想の原点は、弁護士会で里山保全に関する調査・提言活動に関わったことにあります。今では誰もが知っている里山という言葉が使われはじめたのは1990年代初頭のことで、私は、1993年から里山保全の問題に足掛け10年以上関わり、首都圏にかつて広く存在していた農村環境が都市のスプロール化によって市街地に変わり里山が減少消滅してきた過程に、都市計画がどのように関わってきたのかということから調べ始めました。

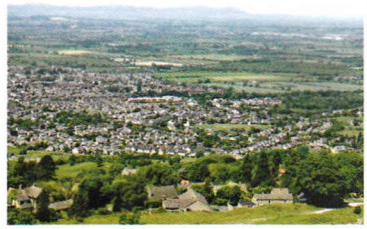
海外に目をやると、ロンドンでは都心から車で30分も行かないうちにグリーンベルトの田園環境が広がります。産業革命による大気汚染が進行して兵隊となる若者の体格が劣化することに危機感をもったヨーロッパ諸国は、公園は都市の肺であるとして都市における緑地保全に意を尽くしてきました。都市にとってその内部や周囲に緑地の存在が不可欠なことは、ヨーロッパでもアメリカでも当然のこととされています。しかし、東京の場合は、都心から1時間電車に乗っても家並が続き、まとまった緑がほとんど見えなくなってしまっているのが現状です。東京にはまともな都市計画がなかったために、こんなに緑が少ない大都市になってしまったのかと思えます。ところが、戦前には東京にも東京緑地計画というグリーンベルトで都心を取り巻く計画がありました。

戦前の専門家は、都市と緑地の関係の重要性を正確に理解して都市計画を作っていたのです。しかし、戦後の経済成長一直線に染まった日本は、最終的に東京緑地計画を放棄して東京一局集中に邁進し、今では東京を都市的集積地域人口3805万人の世界一のメガシティに押し上げました。

3 江戸のまちとイギリスの田園

江戸時代の江戸のまちは人口100万人を超える世界一の都市でしたが、江戸の町は「田園都市」「庭園都市」と呼べるほどに花と緑にあふれていたと言われています。1858年に江戸に入ったイギリス公使のオールコックは、その印象を「(江戸は) 冬でも景色が美しく、広い谷間のふところに抱かれている。ゆるやかな坂が多く、緑の森に囲まれている・・・」と書き残していますし、イギリスの植物学者ロバート・フォーチュンは江戸の町をみて、「樹木で縁取られた静かな道や常緑樹の生垣などの美しさは、世界のどの都市も及ばないだろう」と賞賛しています。同じ世界一とは言え、里山の存在を消し続けてきた東京は江戸とは全く違うまちに変貌してしまったと言えるでしょう。そして、都市に住む人々の田園環境に対する意識もまた大きく変わってしまっているのではないでしょうか。そもそも戦後の日本は、国際競争力の弱い農林業について一貫して税金を投じて保護しなければ存続できない厄介な産業と見做し、自由貿易を進め工業製品の輸出を拡大するために代わりに農産物の輸入を拡大していく政策を推し進めてきました。食糧自給率が40%を割ってしまうことが世界の常識の中ではどれだけ異常なことかを意に介することもなく、真剣に農業振興に取り組んで来たとは到底言えない状況を続けてきたのです。

私が中学生のころ、ビートルズ解散後間もないポール・マッカートニーが発表した「RAM」というアルバムのジャケットはポールが当時購入した農場での写真が使われていましたが、それを見てカッコイイなとは思いながらも何故ポールが農場で生活しているのかよく分かりませんでした。しかし、弁護士会で里山保全に関わり何度か海外視察にヨーロッパを訪ねる中で、欧州諸国で如何に農村や農業が大事にされているかを目の当たりにし、また、ロンドンで成功し財を成した人にとっては、グリーンベルトの外側に家を求め、農村で居住することがステータスであることを知るようになって、ようやくポールが都市生活と農場生活を両立しようとした訳が分かりました。そして、イギリスの素晴らしい田園環境を代表するコッツウォルズ地方を訪ねた時には、人々の普段のくらしが営まれている田舎の村がとても魅力的なことにイギリスという国が持つ田園環境に根差す文化と伝統の力の大きさを感じました。



このようにイギリスの田園空間が美しいことについて、一部の識者からは日本の農村を見習った結果だとも指摘されています。明治時代に日本に視察にきたイギリス人たちが日本の農村の美しさに驚き、帰国して田園整備に力を入れた結果、イギリスの現在の素晴らしい田園空間が形成されたというのです。それほどまでにかつての日本の農村は美しかったのでしょうか。私が昭和44年に区画整理される前の今の乙女の住所地に東京の団地から引っ越してきたころには、確かに日本の農村の美しさの名残りがそこら中に存在していました。そして今の市街地には見られない自然の豊かさがあり、自宅の周りは平地林に囲まれ様々な生きものが生息していました。ある日勝手口のドアを開けると、ドアとコンクリートの三和土の間のわずかな隙間から家の中に侵入していたとぐろを巻いたヘビの姿に驚いたこともあります。家の裏にあった河岸段丘のがけには清水が湧き沢ガニが生息していましたが、区画整理で平地林の多くが伐採され、清水はなくなり人工的排水に取って代わられました。

4 欧米の田園環境保全を基礎とする都市計画と持続可能性

イギリスでは、ハワードが「田園都市論」で提唱した、田園環境の中で人口規模3万2000人程度の都市がクラスター上に存在する都市群の建設がレッチワースで実現し、東京の田園調布のモデルとなりました。ナポレオン3世の命を受けパリ大改造を成し遂げたオスマンは日比谷公園の47倍の広さがあるブローニュの森を整備しました。アメリカではパークシステムによって、都市でありながら都市でない、田園でありながら田園でない郊外が創造されました。都市環境と田園環境を調和させたまちづくりの取組みは欧米では19世紀から100年以上の歴史があります。

里山を保全していくには、改めて都市環境と田園環境の調和がとれたまちづくりのできる都市計画が必要とされます。また、里山が維持されてきた循環型の社会経済システムは江戸のまちを250年以上も田園都市や庭園都市たらしめてきたシステムですし、産業革命の究極に現れた大量生産、大量消費、大量廃棄のシステムが限界に直面したことにより1970年代から始まった持続可能な開発の取組みにとっても循環型の社会経済システムへの転換は必須とされています。

里山を保全することに始まった調査研究は、都市環境と田園環境を調和していくためのまちづくり、循環型の社会経済システムへの転換を前提とする持続可能な社会の構築の問題に繋がり、循環性に根差した有機栽培に取り組む農業の重要性や社会経済システムのパラダイム転換を迫る環境教育の必要性を再認識しました。同時に、共同資源管理としてのコモンズと所有権概念の再構成の問題にもウイングを広げ、2004年の関東弁護士会連合会の定期大会で、責任者として「里山保全の新たなる地平をめざして」とのタイトルでシンポジウムを行い、定期大会で採択された「循環性の象徴として里山を保全していくための宣言」をまとめました。そして、シンポジウムで配布した報告書が出版されることになり、翌2005年に「里山保全の法制度・政策ー循環型の社会システムをめざしてー」のタイトルの書籍が陽の目を見ることになったのです。

5 生きものと共生する持続可能な社会と定常型社会

私の田園環境都市のまちづくりの発想の出発点はこの提言と書籍にありますが、この前後から参画した渡良瀬遊水地はじめ全国の湿地保全に関わる市民活動では、ラムサール条約の掲げるワイズユースの理念が持続可能性の概念と分かちがたく結びつき、湿地保全活動自体が持続可能な社会構築の取組みの一つとの意識をもって関わってきました。里山保全も湿地保全も生物多様性の維持・向上に貢献するという大きな意義を持っていますが、生きものたちと共生できずして持続可能な世界が実現する筈もありません。ラムサール条約湿地登録後に渡良瀬遊水地で行ってきた生態系の頂点に位置するコウノトリの定着・繁殖のための活動は、生きものと共生する持続可能な社会構築の取り組みそのものと言えます。何故なら、コウノトリが生息、繁殖するためには、微生物を底辺、コウノトリを頂点とする生態系ピラミッドの食物連鎖を構成する様々な生きものが生息できるだけの自然環境が維持されていなければならないからです。

里山保全、湿地保全と持続可能な社会構築の取組みに関わる中で、私は持続可能な社会はかつてのヨーロッパの中世のように人口が一定に維持される定常型の社会であることの認識を深め、この分野の大家である現京都大学こころの未来教育センターの広井良典教授の著作にも目を通すようになりました。定常型社会は、右肩上がりの成長、特に経済成長を絶対的な目標としなくとも十分な豊かさが実現されていく社会とされ、市場経済的な需要は量的には飽和し，むしろそれを超えた，コミュニティや自然やケアや公共性等々に関わる，人間のより高次のニーズや欲求が重要になり、働き方や生活の各方面にわたる「豊かさ」が再定義されていく社会とされています。

また、2015年の国連総会で採択された持続可能な開発目標とされるSDGsの17の目標は、環境、経済、社会に関する多岐の項目にわたる目標になっています。持続可能な開発とは、将来の世代のニーズを満たす能力を損なうことなく、今日の世代のニーズを満たすような開発とされており、それを実現していくために様々な事柄が関連していく中で、SDGsでは、環境・経済・社会の3分野が統合するよう17の目標を掲げているのです。そして17の目標を実現することによって、最終的には地球という限られた環境の中で生かされている私たちがその環境容量の中で生活し経済活動を続け、そして一人一人が自己実現できる「誰一人取り残さない」社会（あらゆる人たちが活躍できる多様性と包摂性のある社会）の実現を目指していることを忘れてはなりません。

6 「田園環境都市　小山」のまちづくりとは

小山市は、農業、商工業のバランスが良く、東西南北の交通の要衝にあり、市街地の周辺に農地や平地林の田園環境が広がって思川が注ぎコウノトリが定着・繁殖したラムサール条約湿地／渡良瀬遊水地に繋がるすばらしい環境を有しています。コウノトリによって選ばれた首都圏の中で有数の田園環境都市です。

ユネスコ無形文化遺産に登録されている本場結城紬は、桑の葉を食べて育つ蚕の繭から作られた真綿をつむぐことにより生産される糸を原料とする織物で鎌倉時代に遡る正に循環型の社会が生んだオーガニックな伝統技術であり、田園環境都市に相応しい遺産です。また、国の重要無形民俗文化財に指定された「間々田のジャガマイタ」も五穀豊穣や疫病退散を祈る農村の伝統民俗文化で田園環境都市の重要な構成要素です。このような先人たちの連綿と続けられてきた営みによって形成された田園環境都市としての魅力あふれる小山を将来世代に確実に繋ぎ持続可能なまちにしていくことが「田園環境都市 小山」のまちづくりです。

全世界でSDGsの17の目標を達成することにより持続可能な社会の構築が目指される中で、小山市のまちづくりにおいても当然SDGsの取組みが求められますが、それではSDGsを実践することによってどのようなまちになるのでしょうか。私は、自然生態系の頂点に立つコウノトリに選ばれて共生し、人々が生き生きと暮らす田園環境都市は、SDGsによって実現される持続可能なまちのモデルの一つであると考えています。その意味においても、「田園環境都市　小山」のまちづくりは、この素晴らしい環境を将来にわたって維持向上させ市民一人一人が真の豊かさを実感し自己実現を目指すことのできる、単に市街地整備や農地・緑地の保全等の特定の事業だけを行うのではない、SDGsの実践と一体化し、17の目標をはじめあらゆる分野の政策の体系化と統合が必要とされるまちづくりなのです。

7 地域と暮らしの中にある本当に大切なものを求めて

そして、「田園環境都市 小山」のまちづくりによって市民が実感する真の豊かさとは、私たちの毎日の暮らしの中で本当に「大切なもの」を見つけ出し（⇒「小さな自慢が山ほどあります」）、それを守りながら生き生きと暮らし、確実に未来につなげていくことの中にこそあるのではないでしょうか。

私たちにとって本当に「大切なもの」を見つけ出すために、私たちは日々暮らしている小山市の成り立ち、風土、自然、文化、伝統というものを改めて学び直し、そして、希薄になってしまった地域コミュニティを再構築していかなければなりません。まちづくりとはそこに生活する人々が自分たちの営みを常に見つめ直し、生涯を通して学んで行こうとする姿勢によって支えられるのです。

また、小山市全体の「田園環境都市　小山」のまちづくりを進める上で、その基礎となるのは各地域ごとに行われているまちづくりの取組みです。自分たちの住む地域に対する徹底したこだわりの集積が小山市全体としてのこだわりに結実します。私たちがどれだけ深く自分たちが生活する場所＝地域を良くすることにこだわり関われるのか、そしてその中で私たちにとって本当に大切なものを見つけ出すことができるのか、それによってまちづくりの成否は分かれてしまうでしょう。

「田園環境都市　小山」のまちづくりは、このまちを何とか良いまちにして将来世代に確実につないでいきたいという思いを抱きながら地域に根差して日々生活している市民によって担われる、市民のためのまちづくりなのです。